

平成 30 年 9 月 3 日から 3 泊 4 日の予定で、スタッフと共にオトカ前旗を訪れた。2011 年に始めたフルス村の植樹基地を視察したのであるが、今年の日候が沙柳と楊柴の成長に適していたのか、思っていた以上に成長が良く、初年度に植えた沙柳は 2m から 3m 近くに成長していた。全面に繁殖すれば、十分に防砂林の役目を果たすと思われた。また、枝払いをして葉を集めれば、家畜の飼料に出来るようである。ただ、2011 年から 2013 年に植樹したフルス村では、植樹地の囲い柵が十分でなく、無許可で放牧された羊や山羊が植樹地内に入り、食害を起こしているようである。同行していた事業の責任者は村長を呼びつけ、強い口調で、囲い柵の修復と無許可放牧の見回りを徹底するよう要請していた。記念看板の再建も要請していたようである。



3m になった 2011 年に植えたフルス村の沙柳

2014 年から 2016 年に植樹したハリサリ村でも植樹木の成長が良く、囲い柵や植林管理が行き届いており、畜害はほとんど見受けられなかった。同行した植樹当時の村長も木々の成長を見て満足そうであった。

2017 年から 2018 年の植樹地では、昨年、今年と植え付けた苗木が順調に成長しており、あと 3 年もすれば大きく育って、枝払いが出来るようになると思われる。これが、飼料として活用できれば良いのであるが、運搬などの費用との検討をしなければならない。今回の訪問でも、現地ハリサリ村植樹基地からの帰り道、車のタイヤが砂に埋まって、前にも後ろにも動けなくなり、4 輪駆動車に牽引してもらった経緯がある。

オトカ前旗からの帰り、空港のある銀川市に一泊したのであるが、銀川市内の大学に立ち寄り、日本語科専攻の学生、教師 35 人と懇親会を持ち、若い中国の人と意見交換した。この中で、近隣の内モンゴル・オトカ前旗の砂漠化土地を緑化しようとしていることについて聞いてみた。参加者全員が、遠く離れた日本から環境保



2017 年の植樹地



日本語科学生・教職員との懇談会

全のために、中国の奥地までやって来て植樹をすることは素晴らしい事だと言っていた。また、そのようなことを実行する日本へもぜひ行ってみたいとのことであった。しかし私の感覚では、ほとんどの若者は口で言う程、緑化活動や環境保全活動には関心がなく、日本の若者と同じで、ファッションや音楽に興味が強いように感じられた。ただ、勉強は良くしているのか、日本語科の学生らしく日本語は何とか通じるようであった。